

CHIBA MYCOLOGICAL CLUB BULLETIN

千葉菌類談話会通信

DEC.1995 NO.11

SPECIAL REPORT

千葉県で クモタケを 見つけた!



Erias Fries

佐倉城址公園のクモタケ、
外国のキノコ図鑑紹介、
吉見先生クリスマス講座の案内、
TOPICS、
CROSS WORD PUZZLE 〃
表紙の言葉 〃

クモタケをご存じだろうか。
キシノウエトタテグモという1cmほどのクモがいる。
地面に穴を掘り、
片開き式の扉をつけた巣の中に住んでいる。

クモタケはキシノウエトタテグモに寄生する、
冬虫夏草である。

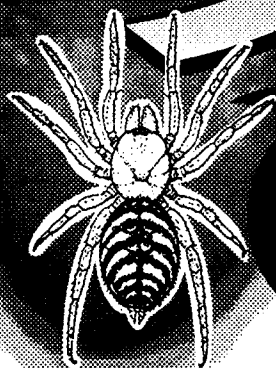
季節になると、分性胞子と言われる
薄紫色の粉をまとった小さなキノコを作る。

千葉県で

クモタケ

Isaria atypicola

子囊菌類スチルラベ科



私が
宿主
です

Latouchia typica

キシノウエトタテグモ

本州、四国、九州に分布し、
神社、人家の庭などに多く生息。

地中に縦穴(産地では横穴)を掘り、入口に扉をつける。

穴の深さは20cmにも達するものもあり、

扉の直径は1.5cmほど。

名前の由来は明治時代の生物学者岸上鎌吉にちなむ。

キ シノウエトタテグモ以外に宿主は存在するのか。関係者の間でちょっとした話題になっている。キノボリタテグモは最も有力視されている。過去にミヤコジマトタテグモ(薬師寺・熊沢1930)・キムラグモ(萱島1958)・ジグモ(安田1915)から発生したという報告もある。しかし、疑問視する人は多い。畑守(1994)は…上顎のまぐわや牙も形態などから、クモの識別法を考案した。そして、本州から九州鹿児島県佐多岬までに発生したクモタケ36個体(うち4個体は樹上性)の宿主をしらべたところ、すべてキシノウエトタテグモであった。九州鹿児島県佐多岬の樹上で採集されたクモタケ(馬場1975)は、キノボリタテグモの可能性があると上田(1990)に指摘されたが、調べたところキシノウエトタテグモであった(横山1994)。今のところキノボリタテグモから発生したという報告はない。

クモタケの分布は、宿主であるキシノウエトタテグモの分布と一致する可能性が高い。現在クモタケは千葉県から鹿児島県にわたり各地で発見されている。キシノウエトタテグモの分布しない東北・沖縄方面からのクモタケ発見の報告はない。さて、図1の地図をよく見てほしい。関東周辺のキシノウエトタテグモ発見地は茨城県南部を北限としている。クモタケに関しては、今のところ茨城県からの発見はない。千葉県が北限となっている。それも松戸市の千葉大学園芸学部(上田1990※)と、天津小湊町の誕生寺(上田1990)の2ヶ所のみ。しかし、今回新たに泉自然公園及び流山市初石ボーイの森でクモタケを採集したので報告する。また、あわせてクモタケに関する情報を参考として記した。

※このデータは吹春採集となっているが千葉大学園芸学部の長尾英幸氏の採集記録に基づくものである。

見つけたぜ! 大作晃一

図1
東京蜘蛛談話会による
1993年クモタケ全国一斉調査結果



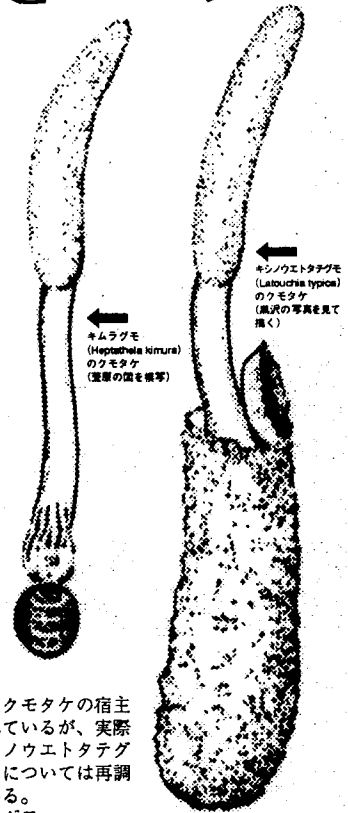
(1993.9.21 現在)

Isaria atypicola

クモタケ発見の記

クモタケ発見の記

1994年6月18日、泉自然公園での事。阿部さん、石田さん、近田さん夫妻、翠田さん、僕の計6人が写真勉強会に集まった。写真の教材を探して外来樹の広場を歩き回る。この広場は一面コケ類におおわれた平地で、散歩するにはとても気持ちの良いところだ。石田さんがコケの上に生える小さな薄紫色のきのこを1つ見つけた。写真の教材にはちょっと小さすぎるなど思ったくらいで、クモタケだとは分らなかった。しかし、その薄紫色のキノコは確かに冬虫夏草の仲間であるかのように思えた。キノコよりちょっと離れたところから慎重に掘り始める。生えているきのこをプチッと引き抜きたい衝動にかられながら我慢して掘る。すると薄紫色のきのこの根元からクモの巣が現れた。それを見て東京蜘蛛の会にも所属する阿部さんが、クモタケよと即座に教えてくれた。クモタケを手にとると、薄紫色の胞子がこぼれ落ちてくる。袋状のクモの巣を切り裂くと、中から1cmにも満たない小さな白い菌糸のかたまりが出てきた。それがクモらしきものだと何となく分かる。冬虫夏草などめったに会った事のない僕たちは、とても満足な気分であった。



クモに発生する冬虫夏草 (清水1979、吉倉1987)

子嚢菌類 実体目	Cordyceps属	イリオモテクモタケ <i>C. cylindric</i>	トタテグモ類に寄生 7月、高脚の原野樹林内に発生。まれ
		ハスミクモタケ <i>C. nelumboides</i>	8月、山地の川辺や林内に発生
Tomubiela属	コエダクモタケ <i>T. leopoda</i>	コガネグモ科のクモに寄生 山地の川辺や林内の葉上に発生。まれ	
	シロミハナグモタケ <i>T. arachnophila var. alba</i>	ハナグモ科に寄生 山地の川辺や林内の葉上に発生。まれ	
	クモヤドリタケ <i>T. araroides</i>	ある種のクモに寄生 主にヨーロッパに発生	
	ガサウラククモタケ <i>T. abolanata</i>	クサチハタグモ <i>Arctides elegans</i> や ウラダグモ科の <i>Gongyldium Lophomre</i> <i>Mengea</i> などに寄生 主にヨーロッパに発生	
	イリオモテコロクモタケ <i>T. sp.</i>	オニグモなどの大型のクモに寄生 山地の林内、芝生の葉上に発生	
	クモタケ <i>N. atypicola</i>	キシノウエタテグモなどに寄生	
不完全菌類 分生子形成 不完全目	Nomuraea属 (<i>Isaria</i>) [※]	<i>Isaria pachylopera</i> (クモタケのシノニム)	
	Gibelula属	ギベルラタケ <i>G. arenarium</i>	<i>Lycosa tarantula</i> <i>Gongyldium rufipes</i> に寄生 6~8月、山地の生草、葉上に発生

※注1/Sanson(1974)は *Isaria* から *Nomuraea* に変更した (山道・横山、1987)

クモタケの性質



クモタケの性質宿主クモタケの宿主は下記の通りとされているが、実際にはほとんどがキシノウエタテグモであり、他のクモについては再調査が必要とされている。

- キシノウエタテグモ
- ミヤゴジマトタテグモ
- キノボリトタテグモ (可能性有り)
- キムラグモ
- ジグモ (かなり疑問視されている)



関東から西、南限は種子島ないし屋久島の低地とされる。キシノウエタテグモの分布に一致すると言われている。日本固有種とされていたが (川村1955)、下記の国々からも報告があった。

- 中国 (上田1990)
- ブラジル (Greenstone et al.1987)
- パナマ (Nentwig1985)

キシノウエタテグモの性質

体長	(雄)	13~17mm
	(雌)	9~12mm
体の形態	下顎	体の形態下顎内縁部に左右各20個ほどの歯状突起がある
	上顎	顎牙部に微小の10~11の歯が2列に並び
	頭部	丸く光沢があり、まばらな毛を生じる
	雄	凹所がある
	腹部背面	紫褐色で7対の白質帯が左右斜め後方に走る
成熟期	(雄)	1年中
	(雌)	9~10月
分布	本州南部、九州、四国 (最近まで不詳であったが1992年に佐野修治より発見される) 関東樹林の分布に一致すると考えられている	
	場所	人家の土台石のわき、神社や寺の境内のふみ石のわきなど、比較的明るい場所の地中。京大植物園では2m近い樹上(枯れた木の幹)に巣を作ることが判明した(クモタケも発生した)
住居	形態	入口に片開きの扉をつける 住居穴の内側は全面糸網で裏打ちされた構造
	長さ	5~7cm程度

地中にふたのある住居を作るクモ

古脚類目 Hepathelidae	キムラグモ科 Hepathelidae	キムラグモ属 Hepathelidae	キムラグモ <i>Hepathelidae kimura</i>
原脚類目 Mygalomorphae	カネコトタテグモ科 Antrodiaetidae	カネコトタテグモ属 Antrodiaetus	カネコトタテグモ <i>Antrodiaetus rorizii</i>
			アントタテグモ <i>Antrodiaetus yezoensis</i>
	トタテグモ科 Cleridae	キシノウエタテグモ属 <i>Latouchia</i>	キシノウエタテグモ <i>Latouchia typica</i>
			オキナワトタテグモ <i>Latouchia swinhoei</i>
		キノボリトタテグモ属 <i>Ummidia</i>	キノボリトタテグモ <i>Ummidia tagara</i>
		ジグモ属 <i>Alypus</i>	ジグモ <i>Alypus karachi</i>
	フスレナグモ属 <i>Calommatia</i>	フスレナグモ <i>Calommatia signatum</i>	

参考 千国安之輔. 写真日本クモ類大図鑑. 偕成社. / 八木沼建夫. 原色日本クモ類図鑑. 保育社.

佐倉城址公園のクモタケ

●佐野悦三

佐倉城址公園でクモタケの大量発生があったので報告する。

本年（1995年）2月19日、千葉市で開かれた千葉県生物学会研究発表会で県立沼南高柳高校の浅間茂先生が、「動物短報あれこれ」と題して発表された。その中に「クモタケによるキシノウエトタテグモのあいつぐ発見」という報告があった。

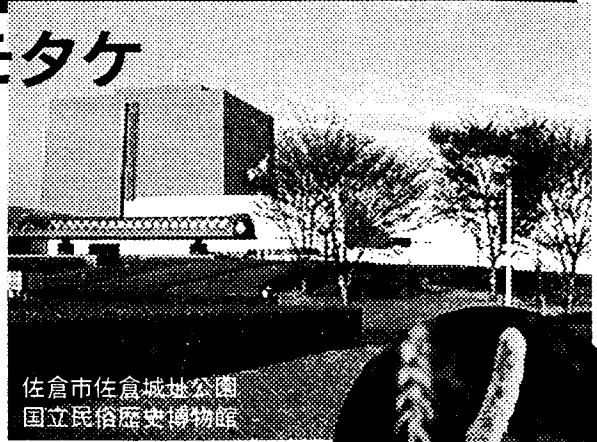
要旨は、キシノウエトタテグモは地面に巧妙に巣づくりすることから直接発見することは非常に難しい。しかし、冬虫夏草の一種であるクモタケがキシノウエトタテグモを宿主として発生することから、クモタケを見付けることによりキシノウエトタテグモの分布が分かる。県内では1987年来あちこちでクモタケが発見されており、キシノウエトタテグモが広く県内にも分布していることが分かった、というものであった。

懇親会で浅間先生に生息場所について伺ったところ、千葉市柏井および佐倉城址公園の発生場所を丁寧に地図まで書いて教えて下さった。

梅雨時の発生シーズンが待ち遠しかったが、7月9日（日）雨の切れ間をぬって佐倉城址公園に出かけた。教えていただいた姥ヶ池南側の斜面および姥ヶ池からグラウンドに通じる階段の両側の斜面を探したところ、わずか一時間弱の調査で20個体以上のクモタケを発見した。

巣は、雨水が入り込まないよう斜面や石垣の間につくられることが多いと教わったが、そのとおり、大部分のクモタケは斜面に発生していた。しかし、姥ヶ池南側の遊歩道の脇では平坦な所に6個体ほど固まって発生していたので不思議に思い周囲をよく見ると、ちょうどそこが斜めに生えた大木の幹の真下になっており、やはり雨がかからない場所であることが分かった。写真撮影をした個体を含め10個体を採集し県博に標本として渡した。

なお、この1週間後には近田さんご家族が、今度は姥ヶ池北側の斜面で30個体以上のクモタケを発見されている。



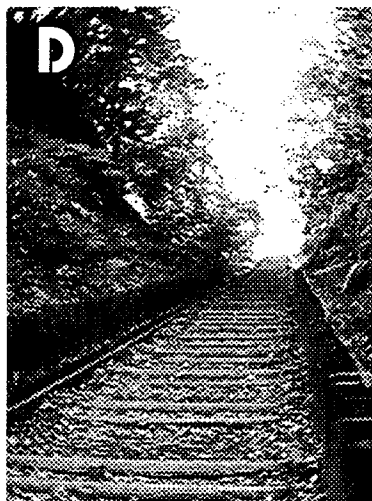
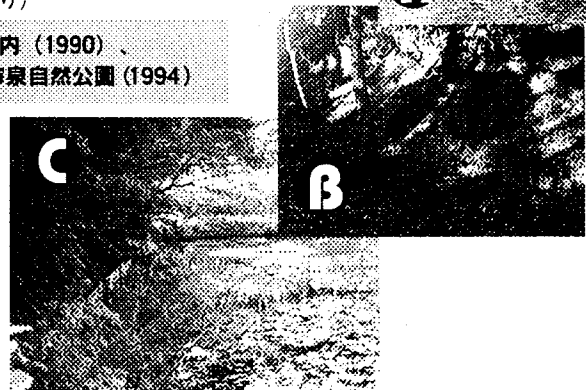
城址公園のクモタケ

千葉県内のクモタケ採集記録（浅間先生の資料により）

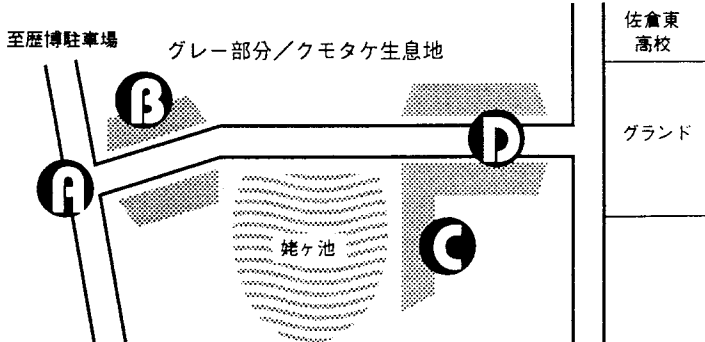
天津小湊町羅生寺（1987）、松戸市千葉大園芸学部構内（1990）、
佐倉市佐倉城址公園（1990）、千葉市柏井（1994）、千葉市泉自然公園（1994）

2月時点では大作さんのクモタケ採集のことは知らなかったもので、先生に話せなかったことは残念である。キシノウエトタテグモの全国的な分布がクモタケを使って調査されつつある。県内でももっと多くの地点で見付かると思われるので、興味のある方は探されてはいかがだろうか。

引用文献：浅間茂 1995「動物短報（1989～）」
（千葉県生物学会研究発表会資料）



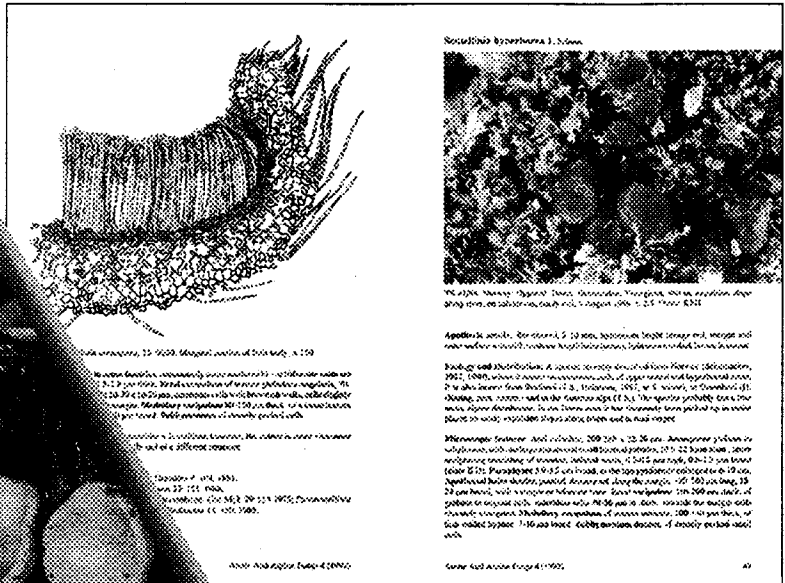
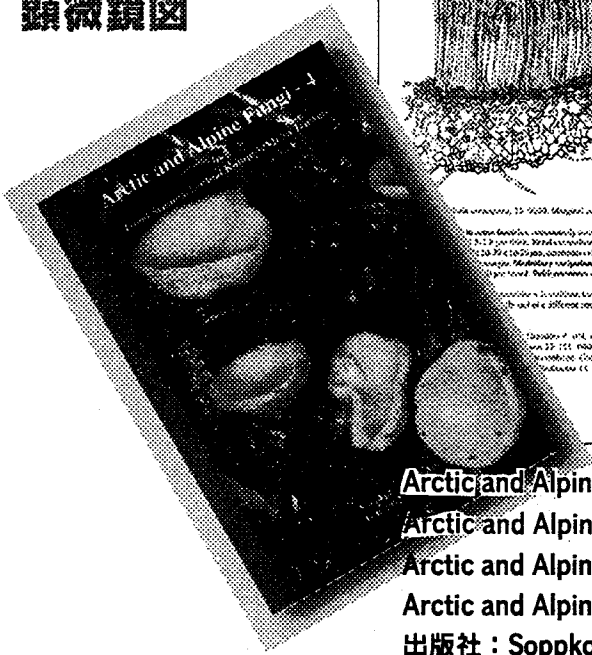
GET THE KUMOTAKE! これが城址公園クモタケ観察ポイント!



COLORED ILLUSTRATIONS

Arctic and Alpine Fungi 1~4

素晴らしい写真と
細密画のような
顕微鏡図



- Arctic and Alpine Fungi — 1, 1985 G.Gulden ほか著
 Arctic and Alpine Fungi — 2, 1988 G.Gulden and K.M.Jensen 著
 Arctic and Alpine Fungi — 3, 1990 B.Senn-Irlet ほか著
 Arctic and Alpine Fungi — 4, 1992 T.Schumacher and K.M.Jensen 著
 出版社：Soppkonsulentent A/S,Oslo,ノルウェー

「北極圏と高山帯の菌類(キノコ)」と訳せばよいのでしょうか。森林限界よりも上部または北に位置する、高山帯や北極圏に特異的に分布するキノコが扱われています。第1巻には南部ノルウェーの山地のキノコ25種が、第2巻には北緯80度近くのノルウェー領スピッツベルゲン諸島スバルバル島のキノコ25種が載せられています。第3巻にはスイスアルプスのキノコ25種が、そして、第4巻には南部中央ノルウェーのチャワンタケの仲間25種が載せられています。それぞれ形態の記載や顕微鏡の記載に加え、生態や分布についての記述、さらに近縁種に比べての特徴などが、素晴らしいカラー写真と、白黒の線画の顕微鏡図とともに、1種類につき2ページを使って載せられています。記載や顕微鏡図は巻ごとにそれぞれ専門の研究者が書いたものですが、カラー写真は4巻とも共通して写真家の M.Jenssenさんが、現地で生えているそのままを生態写真として撮ったものです。森林限界を越えた場所に成育するキノコだけにカサの径も2・3cmどまりの小型のキノコが多く、発生場所も蘚類や苔類の生えている所が多いことが写真から分かります。

さて、注目はチャワンタケの第4巻です。写真も素晴らしいのですが、特筆すべきは、線画で描かれたチャワンタケのミクロの断面図です。個々の細胞の輪郭線が真っ黒の力強い線ではっきりと描かれ、まるで細密画のようです。チャワンタケの図鑑として有名なDennisのBritish Ascomycetes (rev.ed.1981)やSeaverのThe North American Cup-Fungi(1928,1951,rep.1978)では見られないものです。私の蔵書のなかではフランスのMarcelle Le GalのLes Dicomycetes De Madagascar(1953)のなかの線画がこれに匹敵するといえるでしょうか。

装丁はプラスチックのバインダーに各ページを挟んだだけの簡単なものにして価格を押さえています。
 ●価格(送料含まず)
 第1巻 125ノルウェークローネ,13円換算1630円、第2巻・第3巻・第4巻各 210ノルウェークローネ,同2730円

OF MUSHROOMS OF SWITZERLAND

外国のキノコ図鑑紹介

佐野悦三

Fungi of Switzerland Volume 1~4

数多くの種と科学的厳密さを兼ね備えた理想的な図鑑

J. Breitenbach and F. Kranzlin 編

Volume 1 Ascomycetes, 1984 (ドイツ語版1981)

Volume 3 Boletes and agarics 1st part, 1991

出版社: Edition Mykologia Lucern, Lucern, スイス

Volume 2 Nongilled fungi, 1986

Volume 4 Agarics 2nd part, 1995



スイスの中央部、ルツェルン地方のキノコフロラを解説したローカルなキノコ図鑑が世界中からこれほどまでに歓迎されようとは出版を企画したルツェルン菌学会の皆さんも想像していなかったに違いありません。それほど素晴らしくまた理想的な図鑑です。第1巻では子囊菌類390種、第2巻ではヒダのないキノコ528種、第3巻ではイグチの仲間とヒダのあるキノコの第1部450種、さらにこの秋に出版された第4巻ではヒダのあるキノコの第2部465種、第4巻までで合計2千種弱が解説されています。種類の多さだけからみれば、イタリアで出版されている写真図鑑、Bruno Cetto の *I funghi dal vero* (1970-1993) 全7巻合計2,588種にはまだ及びませんが、フウセンタケ科などハラタケ目の残りの科が解説される予定の第5巻が加われば、種数でもこれに匹敵するものになります。内容は、Floristic partと称する種の解説が大部分を占め、さらに掲載された全種が検索できる検索表、用語解説、参考文献表などが付いて

います。種の解説は見開き2ページを3段に分け、1段につき1種、左ページには種の解説が、右ページには孢子、担子器、傘の組織などの顕微鏡図やカラー生態写真がのせられています。

さて、この図鑑の最大の特徴は、「検証できない産地記録リストは紙屑でしかない。」というDennis (British Ascomycetes) の著者: 前述) の言葉を念頭に、記載・図・写真などの元になったキノコはすべて標本にされ、ルツェルン自然博物館に保存されていること、および種の解説部分には調査した標本の標本番号が必ず書かれていることでしょう。そうすることによって図鑑としての科学的厳密さが担保されています。ひるがえってわが国ではたくさんのキノコ図鑑が出版されていますが、その多くが、記載や写真の元になったキノコが標本として保管されているかどうか疑問であるばかりでなく、記載自体も他の図鑑からの引写しかと疑われるようなものがあることは残念なことです。

●価格(送料含まず) / 第1巻 118スイスフラン、90円換算10,620円 第2・3巻各 148スイスフラン、同13,320円 第4巻 158スイスフラン、同14,220円

本の入手方法について

前回、これらの図鑑を海外から直接安く入手する方法をご案内すると書きましたが、現在、世界的な規模のコンピューターネットワークであるインターネットが驚異的な速度で普及しつつあり、これからは、洋書はインターネットを使って注文する時代です。時代遅れの手紙やファックスを使った私の購入方法は紹介すべきでないと思うに至りました。一つだけ皆さんに伝えたいことは、どの様な通信の手段を利用するにせよ、出来るだけ出版社から直接入手することが安く手に入る秘訣だということです。例えば、今回ご紹介したノルウェーで出版された「北極圏と高山帯の菌類(キノコ)」第2巻は現地通貨で 210ノルウェークロネ、円換算で3千円弱(送料含まず)ですが、有名なスイスの自然科学書の通信販売会社では73.30スイスフラン、90円換算約6,600円(送料含まず)もします。もっとも通販すべてが高くて高く、スイスの通販であればスイスで出版された本は直接出版社から入手するのと変わらない価格で購入可能です。

平 凡社から萩原博光・山本幸憲・伊沢正名著「日本変形菌図鑑」定価3,800円が出版されました。現在入手可能な日本語で書かれた唯一の変形菌の図鑑です。検索表と種の記載は、変形菌分類の世界的な権威である山本先生が執筆されました。種の特徴が分かるものにしたという先生の希望で伊沢さんの写真も多くが新しく撮り直されました。3,100円で頒布出来ますので、御希望の方は採集会や菌学講座で私に声を掛けて下さい。

変形菌の図鑑もよろしく



談話会第4回講座ご案内

腹菌類研究の第一人者吉見昭一先生の2日間にわたる講座が実現しました。

クリスマス講座「腹菌類1」

日時●12月23日(土) / 24日(日)

時間●両日ともに10時～15時 受け付けは9時30分から

会場●県立中央博物館 研修室

内容●ニセシヨウロ目、ホコリタケ目、を中心に講義。必要に応じて顕微鏡で観察します。時間があれば千葉県で採れたスポンタケ目の珍菌のスライドも紹介します。

持参物：弁当、筆記具、顕微鏡観察に必要な道具類(プレパラート、カバーガラス、ピンセット、剃刀、インメルジョン・オイル、メルツァー試薬、その他試薬類、等)は、もっておられる方は各自必要な量だけ持参して下さい。持参できない方には会で準備致します。

<懇親会>吉見昭一先生を囲んで

会場●白木屋JR千葉駅前店(Tel. 043-221-6088) (予定)

時間●17:00-19:00頃、会費：3000円くらい

担当●相京康

参加ご希望の方は以下のことを明記の上、談話会事務局までお申し込み下さい。

1 / 氏名、住所、連絡先の電話番号、人数

2 / 参加希望日、両日

3 / 顕微鏡観察を希望する、しない

4 / 懇親会の出欠

●申し込み：ハガキ、ファクシミリ(電話での受け付けはいたしません)

●締切：12月16日(土) 必着

* どちらか一方の講座の聴講も可能ですが、人数が制限一杯になりましたら、2日間通しの方を優先し抽選します。抽選の場合は葉書か電話で連絡致します。顕微鏡台数の制限もありますので約30名を定員と考えています。しかし講義室は45名ほどの聴講が可能ですので、顕微鏡を希望されない方は「23日聴講のみ希望、24日聴講・顕微鏡観察も希望」等、と明記して下さい。顕微鏡観察は午後の予定です。

担当：吹春俊光(Facsimile: 043-266-2481, Telephone: 043-265-3921)

送付先：〒260 千葉市中央区青葉町955-2千葉県立中央博物館 千葉菌類談話会

本郷先生講義録発行のお知らせ

本年度の会の活動として取り組んでおりました、本郷次雄先生の講義録が完成間近となっております。これは、1992年に中央博物館主催の菌類学講座で「ハラタケ目の分類」と題して2日間にわたり行われたもので、会員の小沼良子さんにまとめてもらいました。ハラタケ目の各科の特徴の説明から、菌根菌やキノコの地理的分布といった話にも及んでいます。ページ数は本文40ページ、B5版サイズ。各会員の方には1冊無料で送らせていただきます。会員以外の方、追加注文の方への頒布方法・価格に関しては現在検討中です。申し込みは郵便振込用紙で、価格は送料込みで1冊1000円となる予定です。

ATTENTION !! 会計から

年度会費の未納の方が多いようです。早急に郵便振替で会費の納入をお願い致します。住所ラベルに会費未納年度を記入してありますので、ご確認ください。(会費は1000円です)特に93、94年度と2年間にわたって会費未納の方は、自動的に退会とさせていただきますので、ご注意ください。

例)

〒260 千葉市中央区青葉町955-2

森野き子様

会費未納年度 93 94 95

TOPICS



京都新聞11月16日朝刊より

きたる12月23,24日にご指導していただくことになった吉見先生が、平成七年度京都新聞「五大賞」の中の教育賞を受賞されました。長年きのこを通して理科教育、環境教育に尽力されたことが評価されました。11月22日に、賞の贈呈式が京都新聞本社で行われたそうです。おめでとうございます。(会員の中山治美さんが、吉見先生授賞のニュースの書いてある新聞のコピーを送ってくれました。)

吉見先生京都新聞
五大賞受賞

本郷先生から、吉田松陰の色紙のコピーが送られてきました。

原文 名月に香ハ珍しき木の子かな
松蔭

解説 冷たい獄窓にうめく同囚十一人の心に明るい希望の灯がともる。松蔭を迎えて野山獄には人間を語り合うゆかしさが芽を吹いた。安政二年八月十五日の夜、松蔭の独房に観月の句会が催され、牢獄のしばしが幽雅な福堂と化する。この遺墨はその席における松蔭作の俳句と絵の一幅で獄中生活の松蔭をうかがう貴重な資料である。



松蔭のキノコ色紙

マタンゴのCD発売

あの幻のキノコカルト映画【マタンゴ】のサウンドトラックが発売されました。別宮貞雄氏による素晴らしい音楽は、映像をも想像させるほどですが、ここはぜひビデオを出してもらいたい！もしお持ちの方がおられましたらご連絡ください。

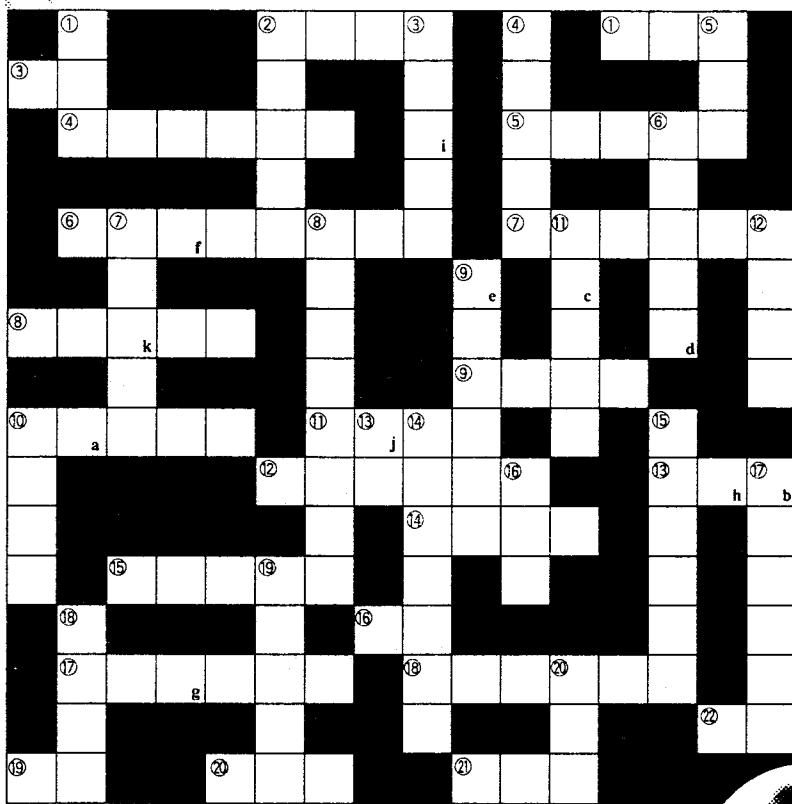


究極のキノコカルトクイズ

キノコ自慢のあなたに挑戦!

制作/井口潔

正解をお寄せ下さった方に素敵なお礼を差し上げます。
1月15日まで。応募お待ちしております。



タテのカギ

- ①ぬるぬるするきのこの代表格
- ②熱すと粉塊状になる多孔菌
- ③かさにも毛状の小鱗片があり、樹上生; 有柄でかさの裏面はひだ
- ④外皮を除き、全面に胞子を形成
- ⑤最近では少なくなったけれど、腐生性のハラタケ目の菌が多い場所
- ⑥いわゆるサルノコシカケ
- ⑦肉が白赤黒と変色し、かさの裏面は、管孔となる食用きのこ
- ⑧枯れ木にべったり背着し、管孔面は多くは肌色淡ピンク色
- ⑨乳液まで真っ青
- ⑩乾燥して市販している
- ⑪黒いしみを除いても毒は毒・・・
- ⑫コウタケに似るが、ひどく辛い
- ⑬きのこの兄弟
- ⑭ほとんどは、ナカゴモロノカサを誤って同定したものらしい
- ⑮料理すると真っ黄色になる
- ⑯葉にケイ酸の結晶を含む。広葉樹; 街路樹によく使われる
- ⑰学名も和名も哀愁あふれる・・・
- ⑱結んで開いてを行う腹菌類
- ⑲橙色のかさと白いつぼを持つ
- ⑳アマタケ・シモコシなどは、これを除いてきれいにするのが面倒

★たてよこの升を埋め、a-kの文字をつけて一つの言葉にしてください。

a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

ヨコのカギ

- ①腐生菌の常備食?
- ②栽培シメジでは一番格下?
- ③これが少ないと、きのこは期待薄
- ④つぼを持つ腹菌類だが、スッポン
タケ目ではなくニセシヨウ目に置かれている
- ⑤わらやバナナの茎を使って栽培される
- ⑥特有の香りがある、可愛いベニタケ
- ⑦サクラの根際が多い、卵黄色のこぶ・・・
- ⑧カンパ林の代表的なイグチの一つ
- ⑨初秋にマツ林に発生する有名な食用菌で、痛んだところは青緑色になる
- ⑩ハツタケに似るが、青変せず、辛い
- ⑪アカモミタケに似て、青変する
- ⑫姿はハナヤサイ、味は茎わかめ
- ⑬ベニテングタケの代表的パートナー
- ⑭京都付近のものは、特に有名
- ⑮毛皮を着け、動物名をいただく
- ⑯ニレの別名
- ⑰学名鳥の糞タケ
- ⑱学名不明の有毒きのこの一つ
- ⑲きのこのふるさと
- ⑳きのこ狩りのついでに、おいしい秋の味
- ㉑シイタケなどの栽培場のこと
- ㉒きのこは緑もゆかりもない



クイズ
 PUZZLE CROSS WORD PUZZLE

■表紙によせて

菌学の父 ELIAS MAGNUS FRIES

●近田節子

今回は“菌学の祖”とも言うべきERIAS FRIESの登場です。学名の最後によくついているFr.はまさにこのFriesからとったものです。(例えば、*Russula delica* Fr. シロハツ) 1794年8月15日にフリースは植物学で有名なあのリンネと同じスウェーデンに生まれました。彼の父が教会の司祭長であったため、幼いころから日常的にラテン語に親しみ、また父から植物学の手ほどきを受け、カノシタ科のきのこの標本に出会ったのをきっかけに、次第に菌類に興味をもっていきました。20才の時、スウェーデンのLund大学に入学し、卒業後も大学に残り研究を



46才



80才

続け、27才から38才までの11年間で「*Systema Mycologicum*」の第一巻～第三巻を書き上げました。「*Systema Mycologicum*」は、菌類の分類のシステムとして最も権威のあるものの一つとされ、学名もこのテキストから優先的に採用されています。ずいぶん若いころから、偉大な仕事をした人だなあとその才能ぶりには驚かされます。1834年、フリースが40才の時、Lund大学からUpsala 大学に移り教授として迎えられました。そして57才から引退する65才まで、付属の植物園の園長を兼務しました。今でも植物園の中にある植物博物館には、他に類を見ない優れた環境の中で、フリースの集めた標本が収められています。ただ彼自身が全て採集したものではなく、ノルウエー、フィンランド、フランス、ハンガリーやその他の海外協力者から送られてきたものを、新種として発表したものが多いようです。彼は、文字通り後半生の40年をウプサラで過ごし、特にスウェーデンのハラタケ類の研究に専念しました。その後、菌類の分類において、彼の研究の集大成ともいえる「*Hymenomycetes Europaei*」(ヨーロッパのきのこの)を1874年8月15日、ちょうど彼の80才の誕生日に完成させました。その記念として撮ったのが、表紙のイラストのもとになった上の写真です。それから4年後の1878年84才でフリースはこの世を去りました。彼の「*Hymenomycetes Europaei*」は、今日までヨーロッパの菌類の分類を担っている重要な本といえるでしょう。

参考文献/小林義雄.1972.分裂子.北隆館./Lloyd,C.G 1904. *Mycological Notes* 16: 157-163./Lloyd,C.G 1909. *Mycological Notes* 32: 414-423.

■編集後記

先日、山形名物のイモ煮をした。毎年、河原をするのだが、今年はなぜか海(外房)だった。その日はとっても風が強く、当然のようにイモ煮は砂まみれだった。盛ってもらった椀の底は砂で黒く、肉はジャリジャリした。思わず椀の中の汁で肉を洗った。その場にいた皆が「イモ煮は海でやるべきでない。」と悟った。どうぞよいお年を。(R)

今年は、ほーんとにきのこの不作の年ではありましたが、何回か食する機会に恵まれました。ウラベニホテイシメジは、湯がいてから一晩水につけてアクをとるなんてことを地元の人にききました。確かにオイシイ! やっとの思いでとった貴重なきのこ、おいしく料理してあげなくてはね……

井口さんに作っていただいた超難解クロスワードパズルが今回から登場しました。はたして何人のかたが正解を送ってくれるかどうか、皆さん、お正月にでもゆっくり挑戦してみてください。井口さんどうもありがとうございます。

フリースの資料が英文だったので、新しく買ってもらった翻訳ソフトをさっそく試してみたのですが、Friesが、いきなり【揚げもの】となってしまいました。トホホです。安易に機械に頼ってはいけませんが、よーくわかりました。(節)

P2~4引用文献

上田俊穂.1990.クモタケ (*Izaria atypicola* Yasuda)の分布 (予報)

日本菌学会ニュース1990-2(No.15) : 89-90.

横山和正・一川由香.1984.大津市近江神宮のクモタケの生態.冬虫夏草No.4 : 3-6.

山道英子・横山和正.1987.クモタケに関する2,3の観察.冬虫夏草No.7 : 22-25.

畑守有紀・横山和正.1991.クモタケの生態-寄主と寄生者の関係-.冬虫夏草No.11 : 10-15.

横山和正・橋屋誠.1994.クモタケの分布調査.冬虫夏草No.14 : 6-10.

新海明・畑守有紀.1994.1993年クモタケ全国一斉調査結果の報告.東京蜘蛛談話会通信No.80 : 16.

佐野修治.1993.四国でのクモタケ *Izaria atypicola* Yasudaの分布.関西菌類談話会報12 : 2-4.

薬師寺栄次郎・熊澤正夫.1930.くもたけノ一新寄生ニ就テ.植物学雑誌44 : 464.

千国安之輔.写真日本クモ類図鑑.偕成社.

八木沼健夫.原色日本クモ類図鑑.保育社.

千葉菌類談話会通信 No.11 1995年12月6日印刷、発行

会長：腰野文男

事務局：千葉県立中央博物館 植物学研究科気付「千葉菌類談話会」

千葉市中央区青葉町955-2

電話：043-265-3921 Fax：043-266-2481

郵便振替口座：00100-5-550400「千葉菌類談話会」